

講演要旨 『サロメ』——愛の舞踏

堀江珠喜

(協会副会長・園田学園女子大学助教授)

Salomé danse la danse des sept voiles.

ワイルドの『サロメ』において、ダンスに関する具体的な説明といえ、この一行にすぎない。そのため七枚のヴェールを用いることはわかっても、どのようにそれが使われ舞われるのかは全く不明のままである。

ところが、実際に上演されてみると、パトリック・デュボンのバレエなどを例外として、芝居であれオペラであれ、ほとんどの場合、ヴェールを一枚ずつ脱いでゆき、高揚しながら全裸あるいはそれに近い姿をヘロデ王の前にさらすというエロティックな演出が採用されている。ちょうどギュスターヴ・モローの裸体のサロメを思い出させる。

「サロメ」がストリップティーズの原型であると俗に言われるように、とりわけ19世紀後期においては、ヴェールの踊り＝ヴェールを脱いでゆく踊りという暗然の理解があったのではないかというふしがある。モンマルトル近くのキャバレーでも、そのような姿の踊り子がよく見かけられたという。それでワイルドもわざわざ詳しい指示をト書きに加え、演出家のセンスにゆだねることにしたとも考えられるし、また、サラ・ベルナルの主演を想定したとすれば、すでに50歳近い彼女を裸にすることを躊躇したとも想像できる。

さて芝居もさることながら、オペラの場合、プリマドンナといえども「歌」と同様に「踊り」がこなせるとはかぎらない。踊りの部分だけ代役がつとめることもあるらしいが、それだけ踊りの部分が長く、また期待されている場面だからであろう。

サロメの踊りばかり注目されることについて、プリマドンナ達は愉快ではないらしい。「オペラの本質は歌なのだから、そんなに踊りが好きならばバレエを見に行けばいいのだわ」というような発言が、近頃出版された歌手達の対談集、*I Remember Too Much* に載っていた。

それでもやはり七枚のヴェールの踊りが気にかかる。それはなにもオペラばかりを念頭に置いているわけではなく、上演されるあらゆる「サロメ」について、処女——女——鬼女への変身を見せる契機として興味深いためである。そこで手に入るかぎりのフィルムを用い、その踊りの場面だけを抜粋し、演出等を比較してみることにした。

まず、ナジモヴァのモノクロ版サイレントの『サロメ』(1923)である。ピアズレーの雰囲気にも近く、オルガンの伴奏が付いて古いのがかえってモダンに思える。振り付けは

単純で、ヴェールは「タコ」の足のようにも見えるが、サロメの変身を顕著に表している。

このか細い王女と対照的なリタ・ヘイワースの『サロメ』(1953)は、まさにハリウッドの絢爛たる作品である。このサロメはヨハネの命乞いをしようと、王に身を捧げるつもりで踊るのだが、母の言葉によりヘロデは処刑を命じてしまう。善きサロメは美しくともファムファタール本来の魅力に欠ける。

カール・ベームの指揮のリヒャルト・シュトラウスの『サロメ』(1974)は、歌って踊れ、しかもカメラのアップにも美しく映えるテレサ・ストラタスの主演である。踊りの後半は、のたうちまわるように体をくねらせ、髪をほどいて鬼女と化する。

ケン・ラッセル監督の『サロメ』(1987)は、男性の代役が噂されるほど、ダイナミックな踊りが展開される。その一方、最もストリップティーズらしい色気を漂わす。ただし、この踊りにおいてサロメの変身は見られない。踊り終わってからも、あいかわらず舌足らずの言いまわしでヘロデをからかい続ける現代っ子である。

全く脱ぎっぷりの見事なのは『サロメの季節』(1984)の少女である。フランスの保養地で裕福な人々が夏を過ごす。サロメというあだ名のクリスは、その母に言い寄るジゴロに恋するが拒否され、クラゲの浮かぶ海へと突き落として殺す。このクライマックスで彼女は、ラジカセの音楽に合わせて踊るのである。

作品の一部にサロメの踊りの効果を用いたものでは、ダーク・ボガード、シャーロット・ランプリング主演の『愛の嵐』(1973)が知られる。ナチスの隊員が、ユダヤの少女を自分達の慰みのために踊らせ、褒美にと囚人ヨハネの首を箱に入れて渡す。まさにエロスとグロテスクの交錯する場面である。

イタリア版『新サロメ』(1985)では、七枚の青いヴェールを脱ぐショートカットの男子のような体型のサロメが、女から鬼女になるかわりに、酒に酔ったようにふらふらする。

このように踊り子にすぎない少女から、ファムファタールの代表まで、サロメの姿はさまざまに表されてきた。その振付がどうであれ、やはり踊ってこそそのサロメだといえるのではないだろうか。

研究発表要旨 『サロメ』とパラドックス

貝嶋 崇

(尚絅大学助教授)

『サロメ』は、パラドックスとはあまり関わりがないように見える作品である。むしろ、